

育ち具合 光で測る

プラントデータ



青色LEDで照らして植物の状態を把握する＝プラントデータ提供

勘と経験だけでは農業は進歩しない――。そんな問題意識を持っているのが愛媛大学発ベンチャー企業PLANT D A T A(プラントデータ、松山市)だ。

北川寛人社長は「植物の声を聞く」という表現を使う。どういふことか。夜の農業ハウスの中を1台のロボットが青色発光ダイオード(LED)の

光を放ちながら動き回る。この光で照らされたときの農作物の反応が北川社長の言う「声」だ。

植物は光合成で必要とする以上の光を取り込むと「クロロフィル蛍光」と呼ばれる光を出す。クロロフィル蛍光の量を把握すれば、光合成の割合いと生育状態を推測できる。クロロフィル蛍光はわずかな明るさのため、夜でないと正確に測定できない。それが夜にロボットを走らせる理由だ。プラントデータはクロ

ロフィル蛍光の量を解析する。農業経験が浅い人でも作物の状況がわかり、次に打つ手がわかる。料金は月額20万円程度(ロボットのリース代などを含む)。現在、約20カ所で利用されている。

プラントデータは富士通と組み、作物の生育状態に合わせてハウスの環境を制御するシステムの開発にも取り組んでいる。「ID(インボータントデータ)農業」を広めようとしている。

(矢野撰士)